

廣瀬駒雄著「喜寿を迎えて想う 『風と光』の歲月」東京通信社 2011年4月22日刊を読む

ピアノが学校に来た日 広瀬駒雄(3年7組)

1. 初めて本格的なピアノ・リサイタルを、3中の講堂で聞きました。演奏者は和田肇さん(記憶が曖昧です)で、当時、NHKにも出演される一流の人と記憶しています。
2. クラス担任の中山瑞穂先生(小学校から通算5人目の女の先生で、一番好きな美人の先生)が音楽の担当でもあったので、演壇の上で演奏者の紹介などをしていただきました。
3. 曲目は思い出せませんが、クラシックでなく、ジャズでもなく、ポピュラーな音楽のメドレーで、当時のラジオ歌謡や外国や日本の民謡で文部省唱歌的な曲を、譜面も見ずに、即興的に弾いていたのが、印象に残っています。見事な演奏で感動したのは当然ですが、広い講堂で全校生徒が熱心に聞き入っていて、終わった時の拍手がいつまでも続いて、あたかも別れたくなくて拍手が鳴り止まないのかと思った程でした。
4. リズミカルなタッチの演奏ぶりもさることながら、その時強く感じたことは、3中が他校に先駆けて立派なピアノ・リサイタルの挙行が出来ることについて、子供心にも誇らしく思えたものでした。あとで聞き知ったのですが、高田薫君のお父さんが湯河原中学の校長で、その縁で実現したとのことでした。
5. 戦後、廃墟となった日本の再建へ向けてのスローガンに、「心に太陽を、唇に歌を」とあったように、軽音楽とか流行歌が大流行となっていきました。
6. 歌は世につれ、世は歌につれと言われますが、小学校(それまでは国民学校)の5年の夏を境に、それまでの国歌や軍歌や寮歌(好きな歌や名曲と信じていた曲がたくさんあった)を懸命に歌ったのが嘘のように、180度転換して「リンゴの唄」「銀座カンカン娘」「東京ブギウギ」などと変わっていくのが急すぎて、やや一抹の不安または不満を抱き始めていました。
7. その折のピアノ・リサイタルは時宜を得たもので、恰も砂漠の中のオアシスであり、一服の清涼飲料水のように、爽やかな文化的行事であったと思っています。
8. 広い講堂で、多くの生徒と聞いたことの素晴らしさ、そしてその臨場感はそれまでの講堂の使用状況では考えられないものでした。と言うのは、講堂はそれまでは田の字型に壁で仕切られて、4つの教室として使用されていたからです。教室の絶対数の不足からで、個々の天井はないので、隣の授業が筒抜けになって、落ち着いて勉強が出来なかった記憶があります。

9 . このリサイタルが、本来の講堂として使用されたビッグ・イベントだったのです。

P30 ~ 31

[コメント]

オリックスの専務取締役や大京の副社長など重責を担われ、現在は経済同友会や東京キワニスクラブ、ディレクト・フォース、学校支援など様々な分野で大活躍中の廣瀬さんの自叙伝。小学校の講堂で初めてピアノ・リサイタルを聴いた日の感動を記したこの文は、音楽教育の大切さを痛感させる。それにしても充実した 77 年間であった。これからの廣瀬さんの御活躍を願わずにはられない。

- 2011 年 5 月 1 日林 明夫記 -